

羽源記

卷

六五

K 2074
Si
3





羽
源
記
卷
六五

K 209.4
S1
3

羽澤記卷之五

延澤能登守勇力元山王権現之事

或曰徳志、能登守力量人、搦まてゐる由、義光常は
其力の程と延澤ありと、思召、近所外頼の侍の内、
陸力のものも七八人、十ごろきて、生痕ごうは、徳志、
義光、好
何とも湯帷子、ついで、海、能登守、あ、は、お、わ、ら、う、け、り
能登守も、内、さ、は、お、せ、あ、け、目、能登守も、内、さ、は、お、わ、ら、う、け、り
又、水、斗、能登守の、さ、庭、へ、お、ま、今、や、と、侍、居、る、あ、り

頃ハ七月五日ノ夜ノ自レも思フク一合もも暇ありて
カも坦然に中七ノ人ノ若果能登るの居るを
て二三ノ人附きしる所を能登る物もせむ
二三日投けしむてまけしとて強ひて人の名も
前後を去りし一合も思フク打倒ししとて
登る物もせむ強倒し刻倒し義走ハたむで
義走ハ許し強倒し叶ひてしとて思フク
てなして強ひてしとて思フク
けしは強ひて思フク
幸極の古本二三日

廻りつらにひしと思フク
と強ひてしとて思フク
ふ力としてしとて思フク
ふ力としてしとて思フク
機屋たかたげしとて思フク
すも強ひてしとて思フク
棄る味方の勢をさ方思ふとて思フク
けり能登守まふ思ふとて思フク

まゝるまゝにうけしる 毎に能登方より 御事の容を成法に入
まじしむれば 御一も心へおぼせぬ 酒宴は好まざりし
物法 善悪の道に 御事 御事 御事 御事 御事 御事
てこそ能登守る 我の五部より 御事 御事 御事 御事
と登り 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
とて 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
大に 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
老翁の 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

大業院 在る 慶余ハ山王の 本地と 互に 南紀と 得ぬらん
とて 祈られ 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
期 是より 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
主 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
累 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
有 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
大 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
堀 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事
院 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事 御事

溢らざるを依り按察使將軍 修仁寺を並頼公に
賜の玉司子補せられ凶徒を河成せしめて寺中神とに
きてことしありけり 以神佛院の奥西よりすば
叶ふべしとて日者の社に詣りて誠々に行られんた
況宜かたしとて則て御所より最上山形より
館と築きて今の山王格段と覆守とに依り義守
義之家の親家信までを並頼公より十代より中
頃の室目山名一併軒月心より補せられ安法國家の
莊藏祈せられしとて一併室子より一併家親の代より
て東海林其の法が末子なることして社務と讓る印名
千年も能書三年の遠者より一併親の勇健とを継
こころけり 軍禮兵衛殿より月心より芳らるる若者として
譽名家信の時代より後之に性虎と位法下として
之れの頃出家入道しけり

室王藏を武政格入事

義之近寄り東海林寺をとりし事なりしに東七八
才のひより文をよきし政房の志願くして平家た

後より筆をなすべしとて山姥にいと自由な遊り
しと十二三歳の間に世に二十三年の者能く力強く養育
さく後之人は其の思ふとなく聰明博識ありと
内外の経典古今の安法一と守りて善を知る謀能
で帰らざるも其の善より法華の持者
よて之を益の教生漁捕とせん其の善を教とせし
なり一節に精進持戒して社寺と掌る信心を端
が義きは信して奥州の境を王、嶽とてしと善より
ぬれは極現をち和合金尊より分ち一ありて善地

とて月山を歩みしと善をさすづ悔の善より世に
来れども夏も雪絶えざりて秋も花の咲續く冬は
拙く行ふれをさすづ悔より善より常の煙の立ちけ
地獄焼くも世にいと山嶽の岩穴の入口に丈斗とて
りしと道あり山嶽の傍より山は是れ人穴とて實
達より入るも山より山嶽の傍より山は是れ人穴とて
人も山嶽の傍より山嶽の傍より山は是れ人穴とて
通絶暗見はき内より山嶽の傍より山は是れ人穴と
中へ入りたる人生きて生きて再び帰るも山嶽の傍より山は是れ人穴と

けりて義を公にするに似てあはれ仙術を得る身なるべし
代の咄もしけたる奥不審なればいふ事なれば
俗の事としていふべし義を公にするに似てあはれ
武政氏家を建てて守りて申すは義も不審なく
とぞいふ様なる事無の事自然の義といふ事
将の事と思ふ事ありては此の事なれば我事
と入り事の好む事申すべし山事なる事なれば
て道五六町を立寄りけりて候へ眠くちりぬる目と
すりて行きけりてや麻道に踏込みぬる事いふ事

り走る車は春の心地にて四方の山と長閑にて花の衣
立寄り谷よりあつた言ふ朝霧の梅は池の水は
お解けて岸のまゆをかくれりて花の衣
まの衣も惜まらぬ事なれば立石を
庭清くけり生る杜若陸の池の草花は折る
開けり垣根の影は花の下に立井の名を杜若
の石垣水は流れて昔の事なれば
花の衣も惜まらぬ事なれば
鳥の衣も惜まらぬ事なれば

氣息よく萩如部花香まきこし知らたの布を傾きては
は落ち之風情して夕金の風を我ぐらん、庭よ白草色を以て
窓の紅葉の隈く傳くまなみな海の鳥ささぐし虫の声を弱く
ゆく北の冬の嵐きて木々の梢も光るよ、燒ゆる花水しき
階橋じまの浮き夜人の言よ道の埋はぬ是のあつたを
まきと思ふはけりてまのまの折はけは一睡のまな
田の車さうと熱いなして行くあは一人のあふ逢ひけり
武政收む是のあつたまきと聞よ、鳥さして回鳴る響
高し〜 笑言下海境のあつて隔生即志とてまの朝を面

まのまき〜 尋らたまき事やを眼と眠り声低く思ひやた尋
ねるや武政まきしてまのまきと聞よ、母の胎よりありし
まのまき、響きまのまきしてまのまき、世間響き
らぐ中国よと知らぬのまのまき、毛刺は津尾子響
水國よと長尾響き、車國よと北條上杉、南海よと織國武
田よと京國よとまのまき、一國一郡も平均ならず日夜
響き、戦行をくぐり偏るゝ為難、残響の響き、響き、響き、響き
漢楚秦自王とて〜 世響き、響き、響き、響き、響き、響き
王殿の討まきと討し〜 響き、響き、響き、響き、響き、響き

分別と以て精しくして、
ハ、夏、秋、冬、春、と次方、
空、土、水、火、と又、
空、土、水、火、と又、
陰陽の如く自然の理、
漸く、
少く、
今、
依て、
一、
王、

衰微、
の、
備、
五、
一、
松、
威、

細川政元を以て江東を所伐し多故五畿七道乱
りてあつて細川高國一軍治くして近江松津を
奪取りしは坂本のは神の計と云其故は昔より王孫の
威のたゞくさくしも濫觴のつたう終令釋するの才の
天皇素旦日如し流布して教を立弘めたる中に
とつし國の神もなきは社稷を守り以て才と比
叡山より中主の神を以て山王と云ふもくろく最
澄法師の所化なり然るも生後時の王位に依りて寺
官寺位と慕う言釈王と天台門寺の相違なきあり

以降 聖徳太子の皇流を古高麗に譲り在りて水
と日と雲の三制の戒行の善も悪も海雲の教を
是汝らの所を思ふま位に自慢して三千の僧侶の定書
を著し門主聖徳の傳教朗月と狗と澄と
二條三國は其の極度取密以心付心の佛法の名目を
と知らば善なる物なり刺入時の運を被り義
園信らと門主と仰せしむるも今還俗して義
教お身もさくしとを以てよ下なきは教の
の善信も千の僧等も皆名も新舊の心

強く言語日りの行跡もりりなる少國の宗
將院之客人と改稱しとて一教の位をのり
山王権院の侍申しけるは只今の所濁世の中
なごう法王遠境の遠伊の對し御政道より
らるる為は折監山徒とて法符これありて然中
法敷りけるはとて年一に案案案案案案案
國に法國寄附のち山と社とありてとて法
今我の衰へり所以の教の鬼門を守りて
は法して代り聖主の法守りてと能て末院

末社と法國の社にりて社する衆れの供物等まで
掃所押領して法者をもて依り國を所々の社奉幣
乞願所或は寺統申す多く有るに故法王の
祖神復を立て是は山城の善政の平均のなる事
越してまゝの氏の名よの替り主位を背りて
るもよりも下たる能ひもとて教の権柄人
昔の如くよみ成りしうぶを世間を流ししとて
今日古の法ももりし平氏の内と後國氏の者
申付るもよみ物法の中と信し四方路りくせりて

集巻の電報... 改めを... 之の氏家... 別... 改め... 國郡... 物... 所... 之... 穴...
集巻の電報... 改めを... 之の氏家... 別... 改め... 國郡... 物... 所... 之... 穴...
集巻の電報... 改めを... 之の氏家... 別... 改め... 國郡... 物... 所... 之... 穴...

金山合戦 先城守退之事

集巻の電報... 改めを... 之の氏家... 別... 改め... 國郡... 物... 所... 之... 穴...

金山の城... 之の氏家... 別... 改め... 國郡... 物... 所... 之... 穴...

けしき典膳大工惣ていひけるを我と作る本入ら道
参るは行とて氏とてはく一時屋住る高經少輔とて
此國を治るとて討ちしりしとて威と奮む義佐
公の臣とてし四海とぞえしとく人吾と祖道登り首
と傾け又山名何三守時氏が四公西國は鼻と高くしせ
し階車不忠の端をりせしとてや思と慕らむ事公は
源棟梁流る之と知らざらんや先祖の系圖を接し
事思の外なる作らねと慕らかなる返りたり義佐之と
すなり典膳は今年十二歳なり若者なれば攻討つとも

い易くしりしとて大勢を引率しおきてのりし典
近きよかれは在家の火を放し一夜野陣を破り
日まぬし押寄せ義佐自米城の近所の山へ登り
城の筋とてのりしとて城とて懸くと懸りしとて
便しし一方は懸河とてち河あり地の利全き城
とては力攻よしけしきとて懸河の方とて懸
とめけし方より城を構へ山の腰を掘切り柵を附
け向ふ者し構へ城の兵糧を尽くしとて待ち自れとて
城に在り懸河の法民を安堵せしとて氣好きめしとて

一文不通ししと返答する者ありしが涪州より母
梁氏の家へはくして乳母の恩ありけりば病あり養子
して産婆と号を極くて馬の病りも奇なりしと唯る夏
しし人実し悪く主の母罷夫人常の禱ありて
一を禱工夫と勤行の産婆を朝夕共例し念を
三念佛と唱ふも外なりしは母教も持し
ずしし母極くて夜なきに幾も痛ししと
も知らず産後し七十二日あり病を患ひて脚も
きてごと床に臥しきしは法念佛と唱ふ忽し

病状然ししと常の如し起上りて傷を醫して曰
西方一路好修行 上無餘額下無坑
去時不用著鞋襪 脚踏蓮華步步生
此偈を詠吟しし口は経ごと念佛の称名を加て
唯る夢寐然ししと感を得ず又問ひけるは
偈の韻律し稱ひ而し佛法大悟の理を念あり
是は何人の語りしやと産婆答へて曰我は
所化の偈なり流る産ひて作るしとし人曰念
佛三昧より發徳して自然智を生ずる者なり

應安二年以氏建之とあり然らば以氏の義満將軍
の跡の人なりと云はれ氏平は東鑑文治五年の字より
見ゆる氏の事いれ持れ、應安二年と見ゆるは
九十二年西學華と代り、西宮次郎澄氏四郎氏説實
澄氏
の傳を宗亮説元又を宗亮氏説を宗亮と云ふを宗亮
晴時其子新九郎入道澄氏と云ふらるるが里より
社務するは、毎年上辛年同一して官大夫に
位五位・補され上は晴時の禮葬と云ふが下の
氏と持れ、一は國高を徳豊と云ふは、近境地境の

事なりと云ひつるは、さうしかり然らば、澄氏の
子西宮を宗亮と云はれ、氏平と云ふは、父より家
の傳を宗亮と云ふは、晴時の禮葬と云ふは、社務職と
と云ひしは、宗亮の事なりと云ふは、社務職と
は、宗亮の事なりと云ふは、社務職と云ふは、中
旬下旬と云ふは、河村村に在る物頭と云ふは、
宗亮の事なりと云ふは、社務と云ふは、宗亮の
事なりと云ふは、社務と云ふは、宗亮の事なり
と云ふは、社務と云ふは、宗亮の事なりと云ふは、
社務と云ふは、宗亮の事なりと云ふは、社務と云ふは、
宗亮の事なりと云ふは、社務と云ふは、宗亮の事なり

堀川とて綱を曳き魚を捕、山林無むけ頃、まがは
獵師禁制の條、くしくも思ひ、に麻村、徳村
を、國中の人民と号し、め、法、及、毒、の、死、を
經、る、一、酒、を、好、む、と、思、女、と、思、ま、ら、容、顔、を、女
と、思、人、質、と、思、け、け、我、信、よ、信、く、ま、さ、る、
家、老、の、言、い、法、を、と、り、も、獲、し、或、は、謀、を、た、れ、或、
追、籠、り、し、れ、一、か、よ、信、入、信、者、の、出、頭、入、中、指、で
追、從、輪、為、斗、し、て、思、事、と、ま、す、と、思、ま、さ、し、
敬、し、け、し、に、國、君、の、お、も、し、に、身、利、登、和、諸、人、參、く

と、自、授、し、て、飛、鳥、の、言、精、り、人、も、し、や、神、と、仙、神
の、は、思、は、ま、り、あ、り、し、し、や、あ、り、し、お、も、し、く、し、神、事
の、礼、を、ま、り、も、ま、り、し、け、け、一、國、中、安、穩、と、思、
お、統、り、七、八、年、耕、作、思、く、民、の、飢、渴、疫、病、絶、え、ず
皆、是、國、主、の、之、禮、に、依、り、神、事、の、あ、り、し、を、
陰、陽、を、ま、り、し、し、け、け、一、信、之、を、中、の、法、士、打、寄、
私、ま、り、し、し、け、け、一、今、の、義、民、の、ま、り、し、し、け、
人、獲、し、後、し、し、け、け、一、毎、日、の、人、殺、し、毎、夜、法
酒、は、飲、み、し、け、け、一、夏、の、祭、に、殿、の、討、玉、未、結、と、思、し

如己の言に随ひて人民を殺し終つ其の才を減らす
昔吳國子ハありとすく祀前ハはけ入りしと傳り
合ひけり 志した義氏ト実子トきた依て兵有頭
義典として其の多嶋の領主なりしとす其の世継
ト定め其年ハ三十三ト隱居の所なりしと其の礼義
ト抱くべし傳者ト人の好むして明著されけり
義氏三十才の時たる少年屋形舞を申後ハ別
當職と相替り即家となる 門弟なるに依て別命と爲
す處ハ其儀りけり 室形と稱するを以て其の規模と

そ義氏ト之を免れしとす此の礼口決ト屋形
の稱號を古大屋に任せし人の居ありしと稱せ
ざりし是れ家の末即家ト考べし人かれが屋
形を許さる是れ傳傳のありしとす 附里ト云
飛集ト人王九子ト代光後院建武とる子ト本國國
顯信上洛ト山氏隨兵洞里ト山伏無量法ト下草兵隨
之ト云ト大山氏ト別ト山武家家の事なりしと
大平記ト奥州の國司ト富原中納言顯家上洛敗軍
河部世とて討死其後舍身顯信上洛の事ト云たり

然るに聖別を朕代へ此高き事重帯し世々
義民を爲す何事も譲らざる士人も多かるべし此世
別業といふは社治山伏の類も思ふに後之其職は與
りて其事を指揮する者ありて後別を皆其職
の総司といふなり武義義氏重なる形といふは
造りて一寺は多し相違山本堂是の村の社治を
之安寺等ありて致所一六の目録と所あり

安保後家傳を四代將之事

治國賢王勿海饗寡賤者不知上成怨敵成讎事
古今其例多し誠し大事小事より起ると見え
たり其頃出羽國管田河野大泉庄内川南余自
館村館主安保全を即能形余才余次郎能保とい
甲し其妹といは余の前より一家の執権といは後
に助聖忠といは聖仁二方の三徳と爲りたる古今無双乃
勇士あり其外佐と本孫と盛多は多平藏信忠大副
無双の傳えたり此高き利將軍尊氏公の執事高
武藏守師直節從安保肥前守忠實安東より後事

壹國全目館村に居城す是より安保五年に即解形殿奉
家ヲ殘十六代とて遠く先祖を尋ねたる人皇五十一
代平城天皇の白皇子安保親王の末葉安保二部安能
末孫より武正の養子國上隱きたりき先祖安保
二部安能平家根州一谷に栢籠り一時源氏に馳加
けり武功の誉隆親朝公の以感し致し安保葉安保肥
前守忠實秋山新藏人と河原合戦の時三百餘度
の戦に参りしと名乗りし事古事記に云く
其後壹國全目に於て至徳三年丙寅霜月十六日卒

も其位牌館村梅枝山乘慶寺にあり也るに安保全志
即解形者謀逆備しし大ねりて進古の掃多門兵衛
心成りてを遣ひ其名の考後代に遺りて其時た内よ
り後壹の戦發り酒田より大敵等ありし安保全志
即大敵とて了を欺き小敵と見ては悔らず謀士として
敵の油断を以て計ひ夜討し大敵と追討り敵の首多
く取てサロキ本師に贈りけりそ言傳へし治世八節為
朝の曰小敵を以て大敵を討つを夜討し如くは言しと
言ひ賢者哲の詞云くを思われし全志即及治代

應仁天乙の乱諸國乱起天下を望む者亦國兵上
玉のやがて二十世人ありとつう甲州に武田信玄越後上長尾
信信相州に北條氏康尾州に織田信長之と四大将
とつうとつう偏善の言ふ天下を争ひつう千餘州
一國も乱じはるはやいとつう遠國片部のたのむ
越後の南の國争いとつうとつう越中一全月も或
時ハ最上とつう敵争も又或ハ酒田とつう兵畢一國
新堀の在家とつう火とつう全月に争もつうとつう
及ぶとつう其項庄の領主悪を成武義氏南部津輕

堀より越中自然乱逆起つ時抑への大將とつう二十
万石程の大者とつう越後最上村田の邊にやれ年中
軍つとつう日とつう争もつうとつう其項酒田とつう山東禪寺の
堀より争もつう入道とつう可とつうとつう人居城とつうとつう

安保金造郎左知行所先武後万歳丸左之事

安保金造郎左ハ川北田尻村の籠主とつうとつう其故田
尻村岡田肥前とつうとつう人のとつう書とつう大山に我氏後正代
ハ此の領ハ申もつうとつう上ハ最上村延五とつう不備根

破城崎原武氏奥州之春秋田屋鐵内ノ破越甚を
門として三百石有して之役を以て居りし所ノ破越の古城
ハ手城として内ノハ塙の宮あり世人亦亦訪傳し之を今
ノ古ノ形あり上伴の青澤村に池あり昔山人は池に鉄
を産し澤に之を以て美女機と織して居りしがわくの宮
汝等へ傳へし一差人百の集る處ありて之を今ノ河越
腰もして鉄と取し傳しして青澤村の山人近代中
比河越代咄の記之大事の事と聞えし所ノ破越或は
万葉丸谷ハ我氏の門華なり

安保及妹お糸の事并小野小出幸成性之事

移入安保及妹お糸の事と申せし所ハ河越の山人お糸の
之を以て河越の鐵と取し傳しして青澤村の山人近代中
比河越代咄の記之大事の事と聞えし所ノ破越或は
万葉丸谷ハ我氏の門華なり

つ其年十五才とて一 叔父少佐小所、善治と号する
よ人自之五十四代に明天皇の時、少佐の部司少佐良
寛正に國と小野とてふをいへり國とす、在り、
の諸、後居ると其後、中川通細谷村、所替と是、小
野十町が父なり、小所、之方三人とて一、父良寛、都人
を、一、治とて、継母之と稱、池、之、母、橋と名け、之と
治、也、一、と、善治、之、幼、稱、之、足、弟、沙、入、と、池、之、所、居、り、
稱、一、なり、近年、は、池、垣、之、人、が、豊、あり、て、垣、一、り、
一、り、則、小、野、氏、の、事、跡、居、る、事、は、池、あり、と、名、定、女

カ、と、稱、し、し、る、昔、物、傳、し、し、り、お、里、の、ち、堂、の、所、物、
是、の、部、司、小、野、良、寛、細、谷、先、住、と、し、一、れ、の、所、居、り、
た、刀、之、ま、ま、た、の、中、之、ち、り、し、し、り、小、所、が、塚、川、北、荒
瀬、御、の、内、觀、音、寺、村、の、下、居、堂、の、ま、り、小、野、十、町、の、境、あり、
五、向、四、方、程、の、塚、あり、松、三、三、を、生、下、け、り、は、ま、少、所、が
正、室、の、塚、あり、し、し、り、小、所、の、安、州、八、十、里、あり、て、里、あり、
け、り、一、記、録、あり、し、し、り、善、治、と、は、お、善、治、の、前、に、小、所、の、美
形、の、所、あり、し、し、り、善、治、は、お、善、治、の、前、に、小、所、の、美
入、り、あり、し、し、り、然、る、所、に、近、隣、河、原、河、原、等、と、し、縣

主事なり一安保御入りお糸の命と頼り所所望の事
取て御老回元の契満るべし安保御より
化瓶免として前方野事方野として二場の谷地
血河平屋へもとれり村老の物語り信之毛を
血河平地飛入全日ふりて一車方野とて若別
車置の事とて

血河八幡宮由来之事

爰に血河平村信長の遺事年譜等として法傳の伝書

神明の遺記として書し置り信長一に二所の氏神
ありけり一は縁起として書し置り一は
可成りなる事とて書し置り一は
是れよりある事とて書し置り一は
又武士の事とて書し置り一は
事多し故に神の縁起として書し置り
或時因國新法として
入場の名として書し置り一は
一七所の縁起として書し置り

川までありぬけるゆゑとして奉問とせしむるにこの位は
百五十六とあると書ふことなり

陣郷の白幡現る事並に部員は合戦之事

昔年余自ら前田陣ありて一敵ありしこと
四五日の今八幡さまの社地余自ら前田にあり
白旗立ちて遠方よりくる時業は遠く六敵あり
一とまはしし事伴とまはるるに其故ある
よふなき例ありたる所の國字は八幡さまの後

放生池ありし池のほとり八幡の白幡現る人群集す
近時をこぞもきく居て将す支へし乱の時なる
八幡の幡下り故に稱難といふ寛永十四年肥前國嶋原
一揆の時八幡現す武士のこぞもはけし神さへ故
事因縁を考ふるに然る時余自ら旅て領内の百姓
にて城の折名難し事合戦の用意せしむるに余自ら
北前今の八幡さまの社地は昔日源八幡を郎義家とて
羽國に之を金澤清原の眞入武則の子武衛家衡
二年に攻て一陣陣の日余自ら今の八幡さまの社に

是より十部をくちりて、
しつゝ自任の意を以て陣ありしに、
と申すは自任の門を以て今より、
さうとて、
二、
たて、
合衆、
と申すは、
と申すは、
と申すは、

休とて、
と申すは、
あり、
と申すは、
と申すは、
又、
と申すは、
と申すは、
と申すは、

討死して若くは業とついでに死しては後世に
蘇生して望むの事はなからしと世に言はくは義
家とて一命一貞任が娘も病歿するに後世に
説の趣くは流石と云ふにせし後貞任歿之乃に
良等と云ひ言ひけりまに病歿親は不孝の女と
を嫁ぬの言もいふに病もまを害するに
信じて終る害を言はく近きと云ふ事ありて
長らくお州へはなして逃けるに今少少の事
一社に命をくといふに命をくといふ事ありて

迫八幡堂より部貞任の着たる紺糸綴と云ふ書
甲のくくく山に捨置きしと云ふ事ありて
と云ふ亦違谷の山石屋の位にせし鬼神の牙も
十枚はまの細くくくく又多の深の紺満庵寺の
後境の池にて貞任足舟物のひをくくく彫刻の像
淫武者とて今も有りといふは昔社田佐井殿
江戸下より仙の神宮に祀りてありて
或は側より持て来りて熊のくくく
と云ふ一節飾りたる袂とて提綱ありて水は沈

羽海記卷之五終

羽源記卷之六目錄

- 一 麻冬三市古物門糶屋掃部追卷事
- 一 上林糶屋永田三士之事
- 一 佐藤平為安保殿預法感事
- 一 寶德寺什物是路村土神之事
- 一 道滿沼之夏是古賢之事
- 一 從要屋形安保御供者之事
- 一 安保屋土浦八事村之事

- 一 群雁北行之事元文下軍之事
- 一 淳義家公匡房卿より軍法を奥儀と傳ふ事
- 一 能登を子助の村へ毒籠へる事
- 一 悪童形義氏公横山殿毒害之事
- 一 淡路合戦を越山腹養火之事
- 一 安保元年群定下る事

羽浮記卷之第六

齋藤三郎忠房の膳屋掃部と追考事

酒田より膳屋掃部と云ふ割の侍遊兵十七騎斗で
 全月所まで軍あるに云ふは誰の事と云ふは馬破生
 と云ふ事一時流炮の家より新多三郎忠房の盛前流炮
 二つと云ふで表へて云ふは云ふ事より羽浮記の世に
 には平兵衛中と云ふは新多三郎忠房の盛前流炮
 を打掛けたに曰ふ事と云ふは膳屋が来たたる鶴毛

後室徳元公殿秀衛子借減之後二十六年驛の侍と
津日海國へ涉臨居りされけりしにありて河内公院
寺と秀衛の妹徳元公院基所とありしに寺と徳公
院と葬りしに古牌の自記ありしに大興の時焚かれ
たりしと記せられたる處戒名の河内院水庵泉遠大
徳定危ありしに余日ちとせられたる處に隨斗りし
二十一人の従士の事あり上林和泉の某と五と斗一人は
兵衛といふ年若水田とあるに後年高平の者人掃屋
掃部ハ大カキ奴よし禮二領 眞の者一徳持よし禮武

考をたつと甲の胸へ打込入りて棒先よきもの右腹破り
り若長二年三月四日号上院海國へ出ぬの時旅に停
上林和泉討死すあるに掃屋義の者も我のうて是軍
りせりと泉と討いしにきしにものこと念の次子に
討死せしと徳持を打て回しに徳持の弟は某に
義まよと謂ふべし ち常の御田守吉部等と申す
也持り水田若狭とと流河内とありしにや
河内守村國某と申すは流河内とあるに討死し
たに掃屋掃部といふ武家の士人ありしに腹中

三帝を奉りて三々くして新境まで進行せしむるに
務むる者なりと諸人感ずるに構屋の子孫を以て奉りて
しるしを海内へしるす事なり

安徳公長治天皇御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗

安徳公長治天皇御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
是れは結言の御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗

けり我衣巻見事一は故は御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
衣巻見事一は故は御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
少治の御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
刀等御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗
御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗

幸多^ク十七^ノの^武者^ト門^ノ庭^ニあ^リて^ハあ^リと^テ後^ニ
武^者と^シ捕^テ押^シ甲^トを^切り^テ人^ノ首^ヲ其^ノ美^田ニ^テ事^ス
あ^リ一^ノ信^チ大^ニ敬^ムク^ニあ^リて^ハあ^リと^テ一^ノ句^ヲ
香^爐上^ニ一^ノ句^ヲ之^ノ言^ハ其^ノ時^ニ生^ル
武^者也^ト

あ^リと^テあ^リと^テあ^リと^テ

九^ノノ^武者^ト一^ノ言^ハ其^ノ時^ニ生^ル
塵^と打^掛の^一句^ヲ其^ノ時^ニ生^ル
一^ノ句^ヲ其^ノ時^ニ生^ル

一^ノ句^ヲ其^ノ時^ニ生^ル
一^ノ句^ヲ其^ノ時^ニ生^ル
一^ノ句^ヲ其^ノ時^ニ生^ル

寶^篋院^付物^並野^村五^神之^事

安^保金^三郎^能形^辰破^越武^彦一^ノ句^ヲ其^ノ時^ニ生^ル
入^テ時^ニ所^ニ宝^篋院^付物^並野^村五^神之^事
一^ノ句^ヲ其^ノ時^ニ生^ル
一^ノ句^ヲ其^ノ時^ニ生^ル
一^ノ句^ヲ其^ノ時^ニ生^ル

諸人ノ一々ノ心ヲ安んずルニ務メテ
トシテ治トシテ善トシテ
収買ノ旨ニ集ル毎歲ニ湖ノ所流ル水ノ
多クハ一ノ所ニ集ル又大ニ集ル所
磯濱トシテ治トシテ善トシテ
コレ釣竿と扱フ

田圃並ニ田圃ノ飛感已ニ莫クナリ將ト爲

と云フ一事ヲ思フニテハ幸々村ノ
事ニテハ田圃ノ飛感已ニ莫クナリ

爲スハ之ヲ爲スルノ事ノ一也
の事ナリルハ向後方ノ村ニ
は方々村ニテハ田圃ノ飛感已ニ莫クナリ
本氏新田ノ飛感ノ事ニテハ田圃ノ飛感已ニ莫クナリ
其後家入道村ニテハ田圃ノ飛感已ニ莫クナリ
み納ルテ田地場ニテハ田圃ノ飛感已ニ莫クナリ
す

從馬屋飛安澤處ノ事

我今朝盡一盡とていふ法を説きしは盡とせしむ
まは女保成を成とていふはめいしきとて高名一と
しては保の良刀とていふは一侍士を言ふなり一若く
日の徳を願ていふは命を失くし古徳より
之や武士の采はたてしやる諸前部へ感激せしは後
生後子が采を授けしは心いれぬる保成は義の依り
軽一又見よ方不為に事也とてく武士の戦場の事
ありし叶はぬ時より潔く討死して名を後代に傳ふ
事武士の志望なりとて見ぬ徳の事も女子の徳も
五岳の如く高きけがも海の如く深しとて
道に事多しとていふはみちや細くやとてたてしは
湯はくしとていふは一むす国に徳が徳の
會は徳なりとていふは徳の

安保金次郎成を成とていふ事

危し勝んでいふを成とていふは命を失くし古徳より
しは安保金次郎成を成とていふはめいしきとて高名一と
信じていふはなりとていふは女保金次郎能保家老佐々

本群物由利をうしとを先とて隨所を隔年して
餘梅の館とちさせしれけり田尻里とて七廿八方の
段馬と黒塗の鞍置らせ全地の邊を掛け合響に細
のゆねとさくられてふささくと踏せて事なれり形勝
南女保まのち好ゆと誇り感づけり兼登りの菟赫
白のたぐいしに貝鞍あき糸袋の鞍をたてぞり
せけり河にも池月磨墨もあしぬきなり見又
澄澄榎も果らせあひしき池断りき新もそととす
柳も池月磨墨の法具とあめりき國はぬ川北

新田月今井の守成内代遊佐御運りの中ふの池の龍馬
の子を池月陣のよらつ時妻叔と斗炎喰ひりといふ
け母馬の塚今よりうらや見むて可いふ又磨墨を陸奥
國の中野とて産之のふてすこふありしといひり然るに陸奥版
本音義件を退治とて都へ攻めり時遊江國佐之本
四郎高徳頼朝より池月を給けり海防をせしむりて
かせりし中野の霧とては二年々たるまじ世もは池
月不斜 勇と身振しとて聲四聲一断しとてし備と
指くがたけりしはは龍の目備しる田子の浦しとて御新

たつと白田山に句首書之とありてはたつと池日ノ啼夢
すもも中一けり古丸ノ大浦ノ旅して多奈知臣武多雲
を形ノ我氏家老ノ四妻筑前守菅沼法部氏之方板中
第七妻新樂亮之外に佐村甲斐守石田備中守方多
八を移つ佐多湯舟小野田源三之等を集めて安保合軍
連一と結ぶるにけり我氏諸士ノ向いけな安保城府ノ味
事天ノふりてありて結言けな従ふも向後樂ノ味
の者も心謀叛とて一不忠無將用事柯ノ時退治
せんとを病と嘘とて登りてく一今時討つて一余

目ノ返も事子里の地をよ虎を放すが如く異國ノ旅て
鴻門の争の時項羽多祖を討つて却て其子と滅は
れり今是ノ黒クテ鬼毎今日透とてはと討敵と
一として陰子一まの陰ノ大力士と隠一まゝなり今泣部
悪を形ノ鉄ノ着き城内より内ノ神と吃とてくま家
光共を好め諸士多くを形の前は双斧とて怒り破ると云
けり討敵とてくま色見りてく一今時余次郎謹んが
申されけり今日足余を節年付はる所ノ四五の
前ノ可方ノ復れ打臥一在るを依てはくまの

此条法免の語を以て有りしは保社者指年は何の信満らん
よふにありなるも有りしと申す事の時義氏公宣ひたる遠
路の宗令に事符奉土儀しりけは使者といひたる事
別義よりいふ今も主従の契約より自然儀也
事起の時と一方の志のしれを思ひしりし能又米田
月中旬越後へて登向る我傳得止りの後方越前王
氏の者共よりて評定ありて國を治むる以道來りしは信
全次郎は由とばり言下し暗に事消骨火と笑中し偷に
説利ス刀とは今義氏の事には信の事にもいふ免角

義氏の内より信ひ意難く揚ぐしと思ふ事ありて中
々々には義事共余の信ひ遠に有はる事ありし様
信の事多事し事所の旨自今事し之にちか之之余
を即けは上意事ありし如法和育る事有りし能又之
を抱くしは服す事有りしといひし事には子孫
下降る信せしれり義氏公全次郎親便の換
指又百勝斗の隨兵何事と一様きより者共りれば
之を討てし事其年却て指と信し其味方多く
討てし且又社田是と越後近國に去敵と抱てし

砂壘より東へて敵能衣斗くば大車りくづり行末
遙の戦り今味方の名士多く討てせては大事
なり爰に縁すべし知れり鬼角安保が攻めま
の兵兵とて文下村へ兵兵とをもつてん

群雁乱行す余文下軍之事

余次郎義氏より所略と申上能の口を越して
少地して里軍門かへもてくれ居あふ向ひ事終
らば東へ遊ばすの景は尺の魔あつてつる危邦

よは入らざれ乱邦を余がんとり孔子の詞今
は時きくと隨兵百騎川はさし飛馬は鞍うち名
も帰られし漢のこゝ祖源人の言の往昔は異
なれば申進ませ余次郎やこれに迎は大海より
軍兵討と慕うて追あるり又行先文下村へ垣伏
の敵あるやも計り難し爰より物具せしめて
樵より飯も之を着し堅軍初兵の形とせし
文下村よりして急ぐ程きく追寄りし時彼村のよ
れり多きの原合のゆをきく鬼きくぬ余次郎

之とて子孫を授け不馬後也今の存金の
行を記して我別記して文選として文は三
士野に伏す時を海軍礼行として事ありぬ海軍
文下村に伏兵ありてと申されしは果して
伏兵ありしに既に文下村に之を討つて其を
つゆとてと録記を揚げておきて十首二十首に
押因るは我討ぬとて道しては昔年海軍に
本軍義件と聞かして又其の余次節今を添へ
て一田に記して是と記して我の記しては歌の多

勢ははたぬが九牛の一毛として其數多く討つては
時々は本隊ありし中をたつて危大別を其の勇士
て近づくと多く切付中とありてその一團に
余次節ありしと記して是と記しては
は本隊ありしと記して是と記しては
中を記しては本隊ありしと記しては
と後代まで其名ありしと記しては
て余次節を棄せしと記しては
討つては其の記しては

身願とてしめて坂川の横山の海とて事越えたり
昔日源平の戦ふ時あるを祀はるまに市盛徳の
参戸の海と海して水知御の飲は感領地を賜り
りけり今又海と事孫はるまに海と事孫はるまに
海と越えて後に事孫全次市より猿猴の月費を
指折の刀より分けしるまに事孫はるまに事孫
猿の月費片方不村とて事孫はるまに事孫はるまに
地と賜り今の盛徳は猿猴の月費を勤功の貴
し顔は事孫武印の忠とて事孫はるまに事孫はるまに

を中と担て事孫川岸の打勝とて事孫はるまに
打勝とて事孫はるまに事孫はるまに事孫はるまに
次川とての戦もかくとて事孫はるまに事孫はるまに
全次市と打勝とて事孫はるまに事孫はるまに事孫はるまに
しけり事孫文下軍とは是なりけり文下
村とて事孫はるまに事孫はるまに事孫はるまに
事孫はるまに事孫はるまに事孫はるまに事孫はるまに
事孫はるまに事孫はるまに事孫はるまに事孫はるまに
の事孫はるまに事孫はるまに事孫はるまに事孫はるまに

置かれしとてさうりあ代清人は瓜の大きをみて目を驚
うけり余次郎全月彼へ帰して後孫忠と近づけしを
汝が勇猛よとる死ともて一生よをりし事偏る汝は命
の親なりとて我が目のみ片方下れけりと言はし

源義家公匡房卿より軍法之奥に我を付し事

往古深八幡を即義家武術進討の勅命を蒙り奥
州より下向せしと彼を先敵なり我命を全うして
帰洛の事も不定なりと思ひ一夜風颯し年月申

龍教を柳も思ひて年月の打音答會を行ひし
透烏帽子に法を以て服指斗して法前近く思ひて
内服を申しし新武具を帯て路傍に書くもひばず
御相違なき舊員して剛なる事と語つべしとて其末に
大江匡房卿之を以て此強して笑はしなり是
強ちに剛の者といはれしべし人の例への俊の者なり其の者
の武に違なきしとて文は剛けりと侍り笑ひし
ときしは源義家道にせしゆを常守の法しと
はして義家公を以て剛に以て笑ふる人よ笑は

おしるよりの大江御主人の巻と説きしるまの面
目よしちりしちりしとて我の文の端なる事
定しちりし奥州下河の事と今年に由る事
御の巻とての事とての事とての事とての事
奥州の事とての事とての事とての事
らりし事とての事とての事とての事
夜迄今夜の事とての事とての事
を打行きの事とての事とての事
雁金の中とての事とての事とての事

つ、馬の事とての事とての事とての事
行とれし飛別しりし事とての事
りし文とての事とての事とての事
定しし事とての事とての事とての事
をどかす引く事とての事とての事
しる夜、野とての事とての事とての事
を結集しし事とての事とての事とての事
代りし事とての事とての事とての事
大江、匡信の事とての事とての事とての事

難と書きたる事一 安保余次市抄傳の事と思ふ
れども、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
事一 抄

能除き子肥り村へ來降之事

安保余次市文下軍の事は、後多し一 余次市雲を
形く、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
果されり、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
け交と文下村へ書きて、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
又余次市

書る形、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
間、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
こゝへ、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
け、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
後、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
夫、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
惟、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
か、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事
大、（抄傳の事） 夫れ能く人の心と云ふとばす事

貫を下ふれたることと考ふれば今次市村の事
逢坂あり又也川村と申ふる十年の向村
と云ふことと云ふ事昔日羽皇開祖能隆太子外が
流しより庄内川に事多松庵と申ふるは具原あ
りし東方の向い遠見たる人字日也川村の
野主の家羽皇の御時と申ふれけるは所と
思ふに又故と尋ねられを我を能き子とて相
ふり同族の事遠くすべしと云ふれけるは其所
今力りし事とて能き太子の法方と云ふ事

交すなりと申上ぐる太子の事なりと云ふ
らば申すべしと云ふ事時城王某息馬より相
思ふを之指したる所社とて三年迄之たべし
能き太子の法方とて何事平念はる様と
能き太子の法方とて何事平念はる様と
其より助川村と云ふ事今の大平田村と
云ふ大平と云ふ事今の大平田村と
云ふ事今の大平田村と云ふ事今の大平田村と
村城内より火煙ありと天と覆ふる時彼と云ふ

思はざし前の竹藪へまゝ出でけり夫より是迄
けり城主薨けりけりまゝけり火災ありけり
り是を子の駿徳とありけり。次子ありけり
後太子羽衣山と云ふ御成り此の村に於て相見
山へ安坐の佛像彫刻ありけり此の山へ安坐せり
此の子の佛像彫刻の女前此の村南前此の
千尋とて灰となりけり此の山へ安坐せり
今此の山を此の島の年中は灰塚とて二つあり
と云ふは此の山をよりけり此の山を清めりけり
ひては此の山をよりけり此の山を清めりけり
久しく連絡して之を此の山とて之を
の禪院と古牌あり

元龜元年壬申三月十五日

異中院殿道兼大禪定門 助川圖書頭

法名ありて之を此の山と云ふ御成り此の村に於て相見
山へ安坐の佛像彫刻ありけり此の山へ安坐せり
此の子の佛像彫刻の女前此の村南前此の
千尋とて灰となりけり此の山へ安坐せり
今此の山を此の島の年中は灰塚とて二つあり
と云ふは此の山をよりけり此の山を清めりけり
ひては此の山をよりけり此の山を清めりけり
久しく連絡して之を此の山とて之を
の禪院と古牌あり

小椽の板をもちて持行はるしゆくと欺きたる言分を
子守の身懐く海をまじくして則椽の板一枚起
着流す處へ持行はるしゆくと今よ何れを海にぬ

悪童形義氏公椽山後毒害之事

是より椽山館主大膳後全月安保全次郎と一語
は大山義氏公へ全善の府の毒害の通しをせむ
はみ果てしれけりや古なる物語なりしに椽山
に於て持のの妖怪ありとくも全月より去る不

思儀ありしとて椽山大膳後之に後義氏公
の門弟武彦茂多由左衛門とて去るは
卒す戒名

○ 常覺院殿月溪照大居士

寛永八年辛未年九月六日

○ 自照院殿親貞心公大居士 俗名不知

寛文四年辰酉五月九日

廣覺院殿檜山玉松大居士 俗名不知

高木善提下泉長寺子去住より去るは

中將と靖原名乗りとてとて中將成義氏の
の命に隨ふる故義氏公懐く旅へ討ふと向ふら
しむるに中將成義の討ふと向ふら
防戦をこころむる多岐の山路に
川退き戦はむと今九郎清水の邊に
を植ふとちり小き墳是古人の首塚なりと
瘡と云ふは煙とてしりて頭塚とて
りけ所大会戦場とてしりて又堀越山を
九郎清水の斗由と尋ねる源頼朝公晩近の侍

九郎盛長初里金山の御け清水のふとて御の
出病甚苦む時羽黒梅現へ祈誓とてけむる
のまじりてけを掘りて清水涌出す乃ち其水
を飲むと勿ら快毒す依之其名と腹養水と稱す
委くま日本名水記に記すことし羽黒山の麓
とけりて清水の事なりとてとて
九郎清水と稱しりて清水の
行きて一口水と稱しりて清水と稱しりて腹養水
とて清水と古名なりとて九郎盛長とて我

八年最上公家職之流中なるは他書陸奥公家
仕へたる者其後代爲國守人氏代年守其
刻添川村は遠く甲州の邊にありて高野山提督
宗柳梅山永徳寺に田地ありて寺所ありて梅津
中將殿御名

寛永十六己外年三月十日

中將院殿法養宗士大居士

貞享四年六月十日

柳林院殿勇心見義大居士 某三女史御名

是の中將殿婦子と云ふるは添川村川西城義
氏公の家臣城守と爲國守

安得殿軍評定下知之事

義氏近隣と切立り遠く碓氷の勢強く新へた
片端より特くと切立ると思ふに先づ今月安得余
吉郎と退治せんとて古刹の侍を將成得道忠に
五子余孫と指添へ先駐として此のへ登向せら
其勢既今上朝丸村の赤築口と云ふ所を陣取

思召れしにたあざ國に帰る要害の経ははる
しとは信と申しつ國に歸して其信をよこの事
おぼしむら成謀よりみだまぬりて古往の天の
地のあらず地の利を人の利にあらずと見えり天利地
利昔人の利にあらず終に新域叶ひて一敵の志を
乃附けを大浪のおつが如く城をちて出で一時の勝負を
決すべし事をあはれしよとて子事陰陽の
謀術して兵法の要極り各名を取ら義を重ん
一余を揚由が夫先とのけ物よものまばをのみあはれ

可申すもあはれ強敵して味方おぼしむる
地をあはれし討死しつ揃へて安保家の美名を
そとへて昔の神ら成金剛山の城に千石の
十部をいし陽倉幣百万騎をいふけりて
事終に勝利をねりて是城中に一日りて
進ひて退くもち將の下志は後して海に
かんけりていざ敵を撃つばう陸砲射し打
えけ渡りてあはれし一なる言とて若くは
一と下志しつを將勇士と譽せり

羽澤記卷之廿六終

上巻の終りにて

羽澤記卷之廿六終
上巻の終りにて

福
安
記
之
印
記
本
館
藏

68566

山形県立図書館



1-0336083-2